



そうでないことは明らかで、むしろこの誇張表現は、その帝国の広大さもさることながら、彼らの傲慢さ、尊大さを皮肉って、述べられているという方が、聖書の読み方としては普通の読み方と言えるのではないのでしょうか。

神の主権の表明という観点から言うとするれば、この時代、「ダビデの王統」による支配の範囲は「地の果てに及ぶ」どころか、ほんの小さなユダ王国においてのみ、実にささやかにしか表明されていないのです。

また、その巨木そのものは、バビロニア帝国ではなく、ダニエルが、「あなたをご覧になった木、…王よ、それはあなたです」(4:20)と述べているように、個人に当てはめられています。実際、ネスカドネザルが、狂気に陥っていた7年間も、バビロニア帝国は、主権を保つてずっと、継続していました。

倒されのは、バビロニアの支配権そのものではなく、単にネスカドネザル個人の経験です。もしこの出来事が、預言であって、ユダ王国の倒壊を表し、「ダビデの王統」による神の主権を表していたとするなら、倒されている7年間に相当する期間（主張している2520年の間）も、ずっとユダ王国のその主権は保たれていなければならないこととなります。

従ってこの、木が切り倒されるという出来事が、エルサレムの荒廃から始まるという説明自体が、つじつまの合わない説明だということとなります。

その主権はその後何千年もの間、完全に消滅していると言うのが歴史の事実だからです。それで、当然のことながら、7年後に回復したのはバビロニア帝国の支配権ではなく、正気を取り戻したネスカドネザルの復帰でした。

ところで、そもそも、このダニエル4章の記述の書かれた目的は何なのでしょう。

(ダニエル 4:31 - 32)「あなたは人の中から追われ、あなたの住みかは野の獣と共になる。彼らはあなたに草木を与えて雄牛のように食べさせ、七つの時があなたの上に過ぎ、ついにあなたは、至高者が人間の王国の支配者であり、ご自分の望む者にそれを与える、ということを知るであろう」。

(ダニエル 4:17)「これは、至高者が人間の王国の支配者であり、ご自分の望む者にそれを与え、人のうち最も立場の低い者をさえその上に立てるということを、生ける者が知るためである」。

このように繰り返されているように、そもそも、何故、神はネスカドネザルにこんな夢を見させ、ダニエルが解き明かすことになり、それが預言者によって記録され、今日私たちが、それを聖書から読むようにされたのかというその目的がここに明確に記されています。すなわちそれは、まず「ついにあなたは・・・」とあるように、直接的にはネスカドネザルが、

そして、「生ける者が知るためである」ともありますから、この記述を通して、さらにすべての人が、「神が人間の国の支配者であり、神の意のままに、それを人に与えられる」のだと言うことを、銘記すべきだと言うことです。

この記述で論題にしている要点は、どれくらいの期間かとか、いつから、などというようなことでは無く、「支配」というものに関する「普遍的な真理」とも言うべきものです。いつ、どの時代のどんな時にも、理性を持つ生物として持っているべき基本認識である「神が支配者」という認識を持つべきだと言うのが、この記録の要旨です。

この「人のうちの最も立場の低い者」は、7つの時が満ちて、正気を取り戻した時に始めて「至高者が人間の王国の支配者であり、ご自分の望む者にそれを与える」と言うことを認識するのであり、まさにその復帰した王に、そのことを認識させるために計画された出来事なのです。

それで、協会の言うように、この「人のうちの最も立場の低い者」が「キリスト」を指しているのなら、キリストは、7つの時が満ちて、王国の王として立った時、始めて「至高者が人間の王国の支配者であり、ご自分の望む者にそれを与える」と言うことを認識することになり、キリストにそのことを認識させるために仕組まれたことだということになるのです。また、ネフカドネザルは正気に戻る直前まで、「獣」のような生活をしていましたから、確かに「人のうちの最も立場の低い者」でしたが、キリストは、(ものみの塔の解釈ではキリストは1914年に王となった、とされる)1914年よりほぼ2000年も前に、すでに「人」でもなければ、「立場の最も低い者」どころか、神に次ぐ最も高い立場にあり、神の右に座す方でした。

(フィリピ 2:9 - 11)「神は彼をさらに上の地位に高め、他のあらゆる名に勝る名を進んでお与えになったのです。それは、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるもののすべてのひざがイエスの名によってかがみ、すべての舌が、イエス・キリストは主であると公に認めて、父なる神に栄光を帰するためでした。」

「預言」はいつの場合もストレートな表現で語られる訳ではないのは確かです。ちょうど、長期保存に適うものとするために、冷凍保存された食品のように、実際に食べる时候になって、解凍する必要があり、言わばそれが「成就」する時と言えるでしょう。つまり、ある「預言」の場合、一つ一つの語句は別の語句や言い回しに変換されているので、実際の成就に照らして、それを戻して、置き換えられた語句を現実の出来事で表現した時、もしそれが本当に「預言」であれば、そのパターンはそのまま当てはまらなければならないということです。

そのパターンがきつちりと当てはまらないのであれば、せいぜい、どこことなく、部分的に

ちょっと似通った話し」というものに過ぎないでしょう。

ある古代に起きた現実が、何らかの預言を含んでいるとすれば、「当てはまる部分」だけが預言であり、他は、単なる歴史です。

この巨木の記述と、それが 1914 年に成就したという解説で「当てはまるパターン」は見いだされません。

もしこの記述に「預言的な要素」が含まれているとすれば、少なくとも、その成就とみなされる出来事は、2010 年の現在までの歴史の中には存在しません。無論、将来にはわかりません。

繰り返しになりますが、ダニエルは「その木は、あなた（ネフカドネザル）を表している」と言います。そして、それ以外のことは何一つ示唆していません。

ものみの塔は「その木は、神の宇宙主権」を表している、と言います。あなたはどちらの言葉を受け入れますか。

神の宇宙主権を代表していたユダ王国を滅ぼし、その民を殺し、虐待し、使役した張本人であるネフカドネザルが「神の宇宙主権」を表していると、根拠も無く断言する神経はどこから来るのでしょうか。

そのバビロンの王について、言うべきことがあるとして、記されている、次のイザヤの言葉に注目してみてください。

(イザヤ 14:4,11 - 20) 「あなたはバビロンの王に向かってこの格言的なことばを唱えて、言わなければならない。…

あなたの誇り、あなたの弦楽器のさざめきはシェオルに下ろされた。あなたの下には、うじが寝いすとして広げられている。虫があなたの覆いなのだ。『輝く者、夜明けの子よ、ああ、あなたが天から落ちようとは！ 諸国の民を無力にさせていた者よ、あなたが地に切り倒されようとは！ あなたは心の中で言った、『わたしは天に上る。わたしは神の星の上にわたしの王座を上げ、北の最果ての会見の山に座すのだ。わたしは雲の高き所の上に上り、自分を至高者に似せる』と。『しかし、あなたはシェオルに、坑の最果てに下ろされるであろう。あなたを見る者は、あなたを見つめ、あなたを念入りに調べて言う、『これが地を動揺させ、多くの王国を激動させていた者か。産出的な地を荒野のようにし、その諸都市を覆し、その捕らわれ人たちのためにも故国への道を開かなかった者か』。諸国民の他のすべての王、そうだ、彼らはみな栄光のうちにそれぞれ自分の家に身を横たえた。しかしあなたは、自分のための埋葬地もないまま投げ捨てられたのだ。憎み嫌われた新芽のように、剣で刺されて坑の石に下って行く殺された者たちにまわれ、踏みにじられる死がいのように。あなたが墓の中で彼らと共にすることはない。』

とりわけ、12 節の「輝く者、夜明けの子よ、ああ、あなたが天から落ちようとは！」の表

現から、これらの語句が、サタンに通ずるものであることを、幾らか聖書を読まれた方なら、すぐにお分かりになるでしょう。

彼の背後には「サタン」そのものがあることが明らかにされています。

(ダニエルは 10 章の記録の中で、「ペルシャの君」や「ギリシャの君」について言及し、そうした国々に専属の？ 邪悪な霊者が担任していることを示唆していますので、「バビロンの君」も間違いなくいるでしょう。この巨木がネブカドネザルを表しているということは、すなわち「バビロンの君」を表していると言うことであり、その背後に僧元締めとして龍であるサタンがいるということです。)

従って巨木が、バビロンの王を表すと言うことは、ネブカドネザルは、サタンの世の政治支配の代表であり、その主権の源は、キリストが「この世の支配者」と呼んだ者以外の何物でもない事が分かります。「神の宇宙主権」どころか、明確に「サタンの支配権」そのものを象徴するものであることを確認するには、幾らかの聖句を調べるだけで十分です。

その支配権は、最終的には、千年王国の終わりまで許される事になっていることは、黙示録に示されていますが、よりによって、この巨木が、神の主権の表明であるという主張は、冒瀆以外の何物でもないと言えないでしょうか。

さて、ここまで調べて見て、気付くことがあります。

この 4 章の記録が「預言」であると断言できる記述は、どこにも何も無いことはすでに述べました。

しかし、他の預言のヒントとして、役立つ可能性はあります。実際、聖書中の多くの記録は、聖書のある幾つかの部分を理解するための情報を含んでいると言えます。

このダニエル 4 章の記録から、ピックアップできると思う、幾つかのキーワードを挙げてみますと、「切り倒す」「獣」「七つの時」「鉄と銅のたが」「最も立場の低い者を上に立て」などです。

これらの語句だけを眺めていると、黙示録の記録が浮かびあがってきます。

先ず「切り倒す」は先に記した、バビロン王に関するイザヤの記録の「輝く者、夜明けの子よ、ああ、あなたが天から落ちようとは！」と同義とみなせます。

つまり、サタンが地に落とされる記述。

ネブカドネザルの巨木は「世の政治支配権」を表している



(啓示 12:9)「大いなる龍，すなわち，初めからの蛇で，悪魔またサタンと呼ばれ，人の住む全地を惑わしている者は投げ落とされた。彼は地に投げ落とされ…」

次に「獣」については、(啓示 13:1)「わたしは一匹の野獣が海から上って行くのを見た。」

次に「七つの時」については、(啓示 12:13 - 14)「自分が地に投げ落とされたのを見た時、龍は、…一時と〔二〕時と半時のあいだ…」とあるように、サタンが地に投げ落とされてから、先ず、3時半(1260日)〔子を産んだ女が養われる期間〕があり、その後、(聖徒が野獣の手に渡される(迫害)期間である残りの3時半、42ヶ月)併せて7つの時(これは、70週の預言の最後の1週(7年)の期間でもある)と合致する。

ちょっと複雑になったので、簡単に言うと、サタンが地に投げ落とされた後から始まり、10本の角の野獣が地上での活動を許される期間が「3.5+3.5時」なので、7つの時となります。1260+1260日で2520日とも言えます。

そして、その7つの時の期間中「鉄と銅」これはつまり、最後の獣である鉄で表される第4番目の獣、とそこから最後に出る、「小さな角」であるところの「かつていたが今はいない野獣で8番目の王でもある、ギリシャ帝国出身の「不法の人」「滅びの子」はダニエル2章の巨像で「銅」になぞらえられている。

つまり、終末期の獣は、鉄の上に銅の角のある者と描写することができます。

ですから、サタンが地に投げ落とされた後の7年間、地上に残っているのは、鉄と銅の2つの「たが」に保護された支配権だけが生きているということになります。

そしてさらに、「最も立場の低い者を上に立て」ることは、「聖なる者たちは王国を取得する」という出来事に対応すると考えられます。

(コリント第一 1:26 - 29)「兄弟たち，あなた方が自分たちに対する神の召しについて見ていることですが，肉的に賢い者は多くなく，強力な者も多くなく，高貴な生まれの者が多く召されたのでもありません。むしろ，神は世の愚かなものを選んで，賢い人々が恥を被るようにされました。また，神は世の弱いものを選んで，強いものが恥を被るようにされました。また神は，世の卑しいものや見下げられたもの，無いものを選んで，有るものが無になるようにされました。」

最後にもう一つだけ気になるところがあります。

(ダニエル 4:26 - 27)「『また，その木の根株を残しておくようにと言いましたから，あなたの王国は，天が支配しているということをあなたが知った後に，あなたにとって確固たるものとなります。ですから，王よ，わたしの勧めをよしとされますように。義によってあなたの罪を除き，貧しい者たちに憐れみを示すことによってあなたの罪悪を除き去ってください。あなたの繁栄を長く続かせることになるかもしれません』」。

この記述から考えられるのは、聖句は何も述べていませんが、当然、7年が終わった後、鉄と銅の「たが」は取り除かれ、その後もこの根株は存続する、そして、再び自由に成長

するということでしょう。

その条件としてネブカドネザルは「憐れみをしめし「罪悪を除き去る」ようにと告げられます。

しかし、実際の歴史の記録は、ネブカドネザルがこの忠告に従った様子はないようです。この「根株が残される」事について、それに対応する将来の出来事があるのかについて、明確ではありませんが、他の関連した預言から類推することはできると思います。

ダニエル 7 章の 4 頭の獣の最後の者が裁かれる時、それ以外の獣についてはこう書かれています。

「ついに (4 番目の) ついにその獣は殺され、死体は破壊されて燃え盛る火に投げ込まれた。他の獣は権力を奪われたが、それぞれの定めの時まで生かしておかれた。」(ダニエル 7:11,12 新共同訳) というところです。

これによれば、最後の獣は現行犯で直ちに滅ぼされるのですが、他の王国、つまり豹 (ギリシャ帝国)、熊 (メディア・ペルシャ)、ライオン (バビロニア) は、支配権だけ滅びて、「獣」としては、その後幾らか、存命する事が分かります。

「定めの時」がどれくらいのなのかは、今のところ、まったく分かりませんが、この時点で、すでに、猶予はなく、たちまちサタンは幽閉されて「千年王国」が始まろうとする時です。ダニエル 12 章の最後の部分からすると、2 ヶ月もありません。

ですから、そんな短い期間のために「定めの時まで生かして置く」と、わざわざ記す必要もないであろう事を考えますと、少なくとも、それらは千年王国に生き残ると考えられます。実際、黙示録にはこの千年間、それが終わるとき、「諸国の民」や「地上の王たち」がいることが描かれています。(※この点に関する詳細は「8 来るべき千年王国の下に地上にいる人々」の資料をご覧ください)

(黙示録 20:7-9) 「この千年が終わると、サタンはその牢から解放され、地上の四方にいる諸国の民、ゴグとマゴグを惑わそうとして出て行き、彼らを集めて戦わせようとする。その数は海の砂のように多い。彼らは地上の広い場所に攻め上って行って、聖なる者たちの陣営と、愛された都とを囲んだ。すると、天から火が下って来て、彼らを焼き尽くした。」

(黙示録 21:24) 「諸国の民は、都の光の中を歩き、地上の王たちは、自分たちの栄光を携えて、都に来る。」

以上、まとめますと、ダニエル 4 章の巨木に関する記録は、サタンが地に投げ落とされてから、7 年間、世の政治組織は、「鉄と銅からなる野獣」として、狂気に満ちた「大患難」の状況を示した後、「聖なる者たちが王国を取得」し、その一部は千年王国まで存続するという、聖書理解を完全に補足するものとなるとみることができます。